

## 万葉集と遊ぶ

大谷博康

悠々自適の生活とは実にうまい言葉ですが、その実態はよく見てみますと、勝手気ままな自堕落な生活なのです。小生は幸い健康に恵まれており、お蔭様で日々をそのように過ごしております。

ある日どういう気分だったのか判りませんが、万葉集なるものを味わってみようと思い立ちました。それは目の前に、わが女房殿がぼけ防止という理由をつけて、NHKカルチャー教室で万葉集の勉強をしている教材がありました。書籍棚にあれこれと万葉集関係の本が並んでいます。そしてある日、万葉集の大家の、犬養孝先生の講義録CD100巻(学習研究社)がわが家に届けられました。活字からの入門はいまさら気が重いのですが、耳からのお勉強なら続けられるのではないかと思っ、気まぐれもまじえて万葉集でも覗いて見ようという次第にあいなったのです。

犬養先生の講義録は全部聴けば1年ぐらいはかかるだろうと思いましたが。その頃は最初の部分はすっかり忘れてしまっているでしょう。しかし現在では、学生時代のときと違って、何の拘束も義務感もなく、嫌な試験もなく、一生懸命勉強するという気分ではなく、日々楽しく聞き流すことでいいと思ひ、気楽に始めてみることにしました。始めてみるとこの教材はまさしくそれにぴったりのものでした。

これまであれほど難解と思っていた万葉集が、実に楽しく聞いていられることに安堵感を覚ええました。全部で4,516首の膨大な数ではありますが、大きく分けると宮廷などで歌われる歌、愛の歌、別れの歌の3つに分類されます。文字が大陸から伝わったばかりの時代、文字を知らない多くの民衆が耳で聞いて唄っていた古謡も多く集められ、古代のロマンあふれる生活が歌われたものです。

先生の講義のなかの万葉仮名や難しい古語の解釈の部分は聞き流し、万葉の時代の人々の生活の中からあふれ出ている心情を味わうことだけで満足しています。犬養先生の講義は随所に犬養節で高らかに歌われておられ、ともかく声を出して歌うことに徹しておられる先生の進め方は、居眠りしながら聞いていても楽しいものです。古代の人の言葉の音楽のような響き、ドラマのように展開していく場面のお話は、時の経つのを忘れてしまいます。柿本人麻呂や大伴家持などの名前や、昔むかしに教科書に載っていた和歌を思い出しながら懐かしく思えて、ついつい先へと進んでいきます。

現在の生活の中で一番の贅沢は、時間が好きなことにいくらでも使えるということです。残り少ないといっても、終わりが何時とは考えなくて、日々を悠々と過ごす。それが凡人に与えられたいい加減な今日この頃の過ごし方です。